

『源氏物語』の心情語

——第二部の光源氏に即して

鈴木日出男

『源氏物語』という作品の表現も、心情を直接に表わす、いわゆる心情語の豊かな発達の上に成り立っている。つまり、その種の語彙が数量的にも増大し、また一語一語の語義語感がいよいよ厳密に区別され、それによって物語の作中人物の心情も微細に書き分けられるようになったのである。そのことは、平安朝社会の言語生活の反映によっていることももちろんであるが、さらに『源氏物語』の構築が当時の言語水準以上の豊かさを形成しているからだ、ともみられるであろう。いうまでもなく『源氏物語』の形容語の用法が、他の平安朝作品と一面では共通しながらも、他面ではこの作品内での独自性を発揮しているのである。

そのような心情的形容語は、用法が厳密であればあるほど無造作には位置づけられていないのだから、当然そ

の用例には物語内容に応じた独自の傾向が示されている。とりわけ、その心情の表わされる作中人物がどのよう
に操作されるかによって、語彙の頻度や用法に偏りがあるはずである。小稿は、第二部物語の晩年の光源氏に即
しながら、いくつかの心情語の用法を探ろうとするものである。

「心苦し」と「いとほし」

一

まず、ここで問題にしようとするのは、類義の心情語「心苦し」と「いとほし」が微妙に使われられている
という点についてである。

たとえば、女三の宮が、柏木との不義の子を出産してから出家を望むようになり、その願望を告げられた源氏
は、即座に「いとうたて、ゆゆしき御ことなり。……」と反対しつつも、その複雑な心中があらためて次のよう
に語られているが、その文脈の中で「心苦し」「いとほし」が厳密に区別されている。

御心の中には、「まことと、さも（女三の宮が出家をも）思しよりのたまはば、さやうにて（出家の人として
女三の宮を）見たてまつらむはあはれなりなにかし。かつ（従来通り妻として）見つつも、事にふれて心おか
れたまはんが心苦し^①、我ながらも（女三の宮を）え思ひなほすまじう、うき事のうちまじりぬべきを、お
のづからおろかに人の見とがむることもあらんが、いと^②いとほしう、院（女三の宮の父朱雀院）などの聞こし

めさんことも、わがおこたりにのみこそはならぬ。御悩みにことつけて、さもや、なしたてまつりてまし」など思しよれど、また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさんことも心苦しければ、「なほ、強く思しなれ。けしうはおはせじ。限りと見ゆる人も、たひらかなる例近ければ、さすがに頼みある世になん」など聞こえたまひて、御湯まゐりたまふ。

(柏木、二九二—二九三頁〈日本古典文学全集、以下引用は同書による〉)

もとより、「いとほし」も、「心苦し」も、弱い相手、劣った相手に対する同情・憐憫の気持を表わす点では共通している。しかし、「いとほし」が弱い者・劣った者という対象の側に表現の主眼が置かれるのに対して、「心苦し」はその対象を受けとめる主体の側に主眼が置かれているらしい。ちなみに『岩波・古語辞典』の解説によれば、「いとほし」については、「弱った者、劣った者を見て、辛く目をそむけたい気持になるのが原義。自分のことについては、困ると思ふ意。相手に対しては『気の毒』から『かわいそう』の気持になり、さらに『かわい』と思う心を表わすに至る。イトシは、これの転。」とあり、「心苦し」については、「相手の様子を見て、自分の心も狂いそうに痛むのが原義。」とある。右に説かれるように、「いとほし」の実際の用法で、「自分のことについては……」「相手に対しては……から……」に変わり、さらに……と具体的な意味が多岐に派生するのも、それだけ対象の多様性に即している表現だからであろう。そこでは、「相手」のみならず、「自分」もまた対象化されることになる。それに対して「心苦し」は、対象じたいに即すよりも、対象に反応してそれを受け取る主体の心情そのものである。極言すれば、前者が、いたいたい、の意であるとすれば、後者は、そのいたいたしさが、こちらの心を狂い苦しませる意、ぐらいの、没主体的と主体的との相違があるかもしれない。そして特に後

者は、「恥づかし」などもそうであるが、こちらが……なほど相手がくだ、という、対象と自己の二面的関係によって成り立つ心情語であるといえよう。

右の物語の用例に戻ろう。①の「心苦し」は、女三の宮が出家もせず、従来どおり源氏に連れ添っていながらも、何かにつけて他人行儀の気持になられては、という事態を想像しての源氏の心情である。妻との関係について夫としての主体から、自らが心苦しむほど相手を不憫だと思っていることになる。これは、女三の宮の不憫さをただ客体的な事実として表わす語ではなく、そのような存在と認める源氏の主観をおし出した表現の語であるといえよう。したがって理屈をいえば、この語には、源氏がなぜ心苦しいほどなのかという、その理由の説明を要請するようなニュアンスが含まれている。そういう点でこの①の背後には、おのずと、不義を犯した妻に対する夫ゆえにという由因、さらに妻と親和できるか否かの問題さえもちらついているであろう。さればこそ、この語を起点として、「我ながらもえ思ひなほすまじう、うき事のうちまじりぬべき」という、妻を許しがたい源氏の心情の文脈がひき出されてくるともみられる。

また、②の「いとほし」は、源氏の女三の宮への冷淡な仕打ちが第三者に気づかれることに対しての、源氏の心情である。これは、源氏個人の主観そのものであるよりも、誰の心にもそのように受けとめられるような宮の不憫さを表わしている。夫に顧みられぬ妻という存在が世間に喧伝されることによって、その不憫さが客観的に明らかにされる体である。それゆえに、父朱雀院の知るところともなるのである。かくして、この「いとほし」は、客体的存在をさしているといえよう。しかし、③の「心苦し」は、同じく女三の宮の不憫さにふれても、②とは逆に、源氏の主観的な内実によっている。うら若い女の出家を想像しての、この「心苦し」には、源氏のな

おも捨てがたい彼女への未練が揺曳していよう。この語は、先立つ「いとあたらしう、あはれに」のはげしい執着と感動を表わす文脈と、的確にひびきあっている。この「心苦し」は、その主観的内実の由因をさぐりあてようとしているのである。

右の一節における「いとほし」「心苦し」は、いずれも源氏の女三の宮に対する憐憫さを表わす語ではあるけれども、見られる対象と、見る主体の、いずれの側にその主眼があるかの相違があり、これらはすべて入れ替えの不可能なかたちで、文脈に定位している。

二

さらに「いとほし」「心苦し」の相違を検証すべく、ここでは、二語の並置されている用例にふれてみよう。

(1) かく、(源氏が柏木と女三の宮の不義について) けしきも知りたまはぬもいとほしく心苦しく思されて、宮(女三の宮)は、人知れず涙ぐましく思さる。
(若菜下、二二二頁)

(2) (源氏は朱雀院を) いといとほしく心苦しく、かかる内々の(女三の宮の不義の内情の) あさましきをば聞こしめすべきにはあらで、わが怠りに本意なくのみ(朱雀院が)聞き思すらんことをとばかり思しつづけて、…
(若菜下、二五八頁)

(3) (柏木は女三の宮を) 長き世の絆にもこそと思ふなむ、いといとほしき。心苦しき御ことを、たひらかにとだにいかで聞きおいたてまつらむ。
(柏木、二八五頁)

(4) (源氏の心中)いとほしう、いづ方にも(雲居雁にも落葉の宮にも)心苦しきことのあるべきこと。

(夕霧、四四二頁)

(5) (明石の君は源氏の) 思したるさまのことわりに心苦しきを、いとほしう見たてまつりて、……。 (幻、五一九頁)

右は、第二部物語からの任意の引用にすぎないが、並置されることじたいからも、二語の相違は明らかである。これら「いとほし」↓「心苦し」には、見られる対象の外面から、見る主体の内面へという、視点の移動がある。(1)では、真相を知らぬ源氏を不憫と見ている女三の宮の視点が、その真相を秘めねばならぬ自己の苦悩への凝視に転じている。(2)でも、愛娘への執着を断ちがたい朱雀院を見つめる源氏の目が、そうした父院の不安を取り除けない自分自身のふがいなさに向けられることになる。(3)の二語の関係は一見逆のようにもみえるが、「いとほし」は、女三の宮への愛執に呻く柏木自身が、自己を対象化した発想であり、そこから転じた「心苦し」は、相手をそうさせた自分の苦悩を見つめようとすると主体的な発想である。(4)は、夕霧の落葉の宮との恋を傍観する源氏の感想であるが、恋ゆえの不幸を「いとほし」と直観しつつ、さらに二人の女それぞれの悲運を他人事ならぬものとして「心苦し」と受けとめたことになる。最後の(5)は二語の順序が逆だが、まず、紫の上と死別した源氏の悲痛さを、明石の君の主観に即して「心苦し」とする。「ことわりに」から知られるように、最愛の人の死ゆえにそれが当然であると、明石の君が思うのであり、さらにそれを確信するところから、「いとほし」として対象化される。

右の挙例は少ないが、「いとほしう心苦し」の語序でやや成句的に用いられる例が多い(5)は例外的。それは、前述したように、外面から内面へ、対象から自己へと転換することになる、視点の移動を可能ならしめる物語表

現の一類型であるようにもみられる。そして、次のような例も、その一変型にはかならない。

(6) (女三の宮は源氏に出家を反対されるが) つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや、と(源氏は)見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。
(柏木、二九七頁)

(7) さは(女三の宮の出家の由因は)、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと(源氏は)思すに、いとほしう悔しう思さる。
(柏木、三〇〇頁)

いずれも、「心苦し」と同様に主観的な形容語としての「あはれ」「悔し」が用いられている。(6)では、無表情を装っている女三の宮の苦衷を推量するところに、源氏の感懐が生ずる。また(7)では、女三の宮の出家が物の怪に謀られたと、源氏は悔むのである。(6)にしても(7)にしても、憐れむべき存在としての外貌を眺めた上で、その内実に立ち入ろうとする視点の移転がみられるのである。

以上、「いとほし」「心苦し」の類義語の並置される例の少なからぬところから、二語の微妙な相違を考え、また、その二語並用の形式が物語に視点の変換をもたらす独自の表現形式たりえている点をもみってきたことになる。

三

「いとほし」「心苦し」が、物語中どのような頻度で用いられているかを、巻別に一覧すると次のようになる(の上の数字が「いとほし」、下の数字が「心苦し」)。

〈第一部〉 桐壺(0/6)・帚木(11/7)・空蟬(7/0)・夕顔(6/4)・若紫(7/4)・末摘

花 (6/13) ・紅葉賀 (6/4) ・花宴 (0/1) ・葵 (10/16) ・賢木 (12/8) ・須磨 (2/8) ・明石 (10/6) ・滯標 (3/7) ・蓬生 (4/7) ・絵合 (3/2) ・松風 (1/4) ・薄雲 (6/7) ・朝顔 (2/3) ・少女 (10/10) ・玉鬘 (4/3) ・初音 (1/3) ・胡蝶 (0/4) ・螢 (3/0) ・常夏 (6/1) ・篝火 (1/0) ・野分 (1/5) ・行幸 (4/1) ・藤袴 (3/2) ・真木柱 (14/5) ・梅枝 (0/1) ・藤裏葉 (1/1) ・計 (144/143)。

〔第二部〕 若菜上 (14/22) ・若菜下 (22/23) ・柏木 (7/15) ・横笛 (2/1) ・鈴虫 (0/1) ・夕霧 (21/10) ・御法 (2/4) ・幻 (5/5) ・計 (73/81)。

右によれば、第一部で二語がほぼ同量であるのに対して、第二部では「いとほし」よりも「心苦し」が多く、その限りでは内面的といえようか。第一部でまず注意されるのは、「帚木」「空蟬」「夕顔」「末摘花」「蓬生」巻での、この二語の多量さである。いうまでもなく、源氏に対する空蟬・夕顔・末摘花らの身分・境遇の格段の差からここに憐憫の情が誘発されるのだが、このうち特に末摘花の造型が「心苦し」の語に偏る点は見逃せない。

a わが (大輔の命婦が源氏に末摘花への手引きを) 常に責められたてまつる罪避りごとに、心苦しき人の御もの思ひや出で来むなど、やすからず思ひるたり。
(末摘花、三五六頁)

b 軽らかならぬ人の御ほどを、(源氏は) 心苦しとぞ思しける。
(末摘花、三五八頁)

c (末摘花が) さすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじ、と心苦しく思ひしを、年ごろさまさまのもの思ひにほればれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、(源氏は) いとほしく思す。
(蓬生、三四二頁)

命婦など末摘花周辺の人々はもちろん、源氏本人も、彼女に流れる王族の血を意識するところから、単に憐憫の対象とだけ見ていてのではない。「年ごろ……つらしと思はれつらむ」のような源氏との相對關係からだけ捉えられているのではない。そこに、空蟬や夕顔などに対するのとは異なる、源氏の主観的なこだわりがあり、二人を繋ぎとめる不可思議な力が作用するゆえんでもある。

「葵」巻での「心苦し」の多量は、葵の上の懐妊と病死、六条御息所の苦悩と物の怪出現などの、異例や異様な事態の出来に由因している。たとえば次のような例がある。

(a)めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、(葵の上の親たちは)心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。(二五頁)

(b) (六条御息所が)常よりも心苦しげなる御氣色を(源氏は)ことわりにあはれに見たてまつりたまふ。(二八頁)

(a)は、懐妊の身に物の怪のとりついた葵の上の苦しみを、わが身の苦しみとして受けとめる両親。(b)は、車争い後の御息所の痛々しさを思う源氏。「……げなり」は、誰の目にも明らかかなほど……、の意で、客観性を示す語法ではあるが、「心苦し」本来の主観性として、彼女の苦悩が自分と無関係でないとする気持がこめられているはずである。

また「須磨」巻にも、源氏流離という異常な事態として由因に、別れがたい人々の切ない離別が「心苦し」の主観的な語を集中させることになる。逆に「真木柱」巻では「いとほし」に偏っているが、鬚黒が玉鬘のもとに走った後の家族の離散が、憐れを誘うのは当然なことであるとして、しかもやや突き放したかたちで客観的に語られている。

第二部の「いとほし」「心苦し」は、女三の宮関係でその過半に及んでいる。彼女は朱雀院最愛の皇女として出家の絆にもなっていたが、父院の出家の強行にともなつて六条院に降嫁することになる。しかし源氏の正妻の座を占めたものの、紫の上以上の寵愛を得ることができない。源氏の疎略な扱いという風評が世間に流れ、それが父朱雀院の心痛の種となり、さらに源氏の朱雀院への思惑を深刻化する。一方、かつての婿がねの一人であった柏木は、そうした女三の宮の動静をうかがいながら、なおも思慕し続けている。しかもこの横恋慕を、親友の夕霧は早くから直観してもいた。こうした情況は、必然的に、人さまざまの立場からの多様な視線を女三の宮に集中的にあびせかけることになる。父朱雀院の断ちがたい肉親の情、その父院の思惑を顧慮しつつも彼女を最愛の人とはなしえない源氏の義理と人情、紫の上や明石の君など源氏の妻妾たちの立て前と真情、柏木のやみがたい恋情、夕霧の第三者的な観察、そして世人一般の野次馬的な関心。こうした多様の視線が、じつは「いとほし」「心苦し」の形容語を多用させているのである。わけても、朱雀院・源氏・柏木の切実さが、「心苦し」という、より主観的な評言をもたらすことになる。

しかもその「心苦し」が特に顯著となるのは、柏木が女三の宮に密通してやがて源氏の知るところとなった時点以降においてである。たとえば、次の例を読みたい。

(柏木)「……かくいとほしき御身(女三の宮ご自身)のためも、人(柏木自身)のためも、いみじきことにも

あるかな」と、かの御ことの心苦しきも、え思ひ放たれたまはず。宮(女三の宮)は、いとらうたげにて悩
みわたりたまふさまのなほいと心苦しく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、うきに紛れぬ恋
しさの苦しく思さるれば、渡りたまひて見たてまつりたまふにつけても、胸いたくいとほしく思さる。

(若菜下、二五〇頁)

前半の柏木の心情を語る文脈と、後半の源氏の文脈が照応しあい、ともに女宮を「心苦し」く思うところから
いよいよ執着の虜となる点において、両者は共通している。もっとも源氏の場合、「なほ」「あやにくに」の語に
よって、他面では宮を厭うべきとしながらも執着される気持を語っているのだから、柏木の一途さとは異なって
いる。それにしても、ここでの「心苦しき」は、それゆえに愛執を強化させることを意味するのであり、もう一
語の「いとほし」とも異質であろう。

事態の進展にともない、「心苦し」の語を用いる主体がしだいに源氏に集中し、しかもその対象は女三の宮に
限らず、柏木にも、不義の新生児薫にも、あるいは自分自身にも向けられるようになる。

(a) さるは、(柏木が)そこはかと苦しげなる病にもあらざなるを、思ふ心のあるにや、と心苦しく(源氏は)思し
て、とり分きて御消息遣はず。
(若菜下、二六四頁)

(b) (生まれた子が、もしも)女こそ、何となく紛れ、あまたの人の見るものならねば安けれと思すに、また、か
く心苦しき疑ひまじりたるにては、心やすき方にもしたまふもいとよしかし。
(柏木、二八八頁)

(c) (新生児薫に対して)おほかたのけしきも、世になきまでかしづききこえたまへど、大殿(源氏)の、御心の中
に心苦しと思すことありて、……。
(柏木、二九〇頁)

(d)女宮(明石女御腹の第一皇女)ものしたまふめるあたりにかかる人(薫)生れ出でて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし。

(横笛、三三八頁)

(a)の柏木に対する「心苦し」の思念も、(b)の薫への「心苦し」さも、単なる同情憐憫ではなく、源氏自身の苦衷さの先行する思いであろう。また(c)の「御心の中に心苦しと思す」の言いまわしは、相手への顧慮がほとんど抜け落ちた、自身の苦渋そのものである。(d)では、新生の薫の将来に不義の子らしい好色癖を想像し、さらに女宮の不義を想像して恐れるのだが、この「心苦し」も厭うべき苦々しさに近いであろう。これらの例から知られるように、源氏晩年の物語においては、「心苦し」の語は、いよいよ表現主体の感情を前面に押し出すようになっている。それは、女三の宮事件をしないで自己の問題として受けとめるようになった結果だともいえる。前引の、夕霧と落葉の宮の事件を傍観しながらも、「いとほしう、いづ方にも心苦しきことのあるべきこと」(夕霧、四四二頁)と嘆くのも、恋の人間関係を通して愛執の課題が問われるようになっていくからであろう。

以上、第二部において女三の宮関係に集中する用例を見てきたが、その頻度分布からも特に重要と思われるのは、源氏が女三の宮を「心苦し」とし、さらにそれを起点に多様な「心苦し」さを深めていくという点である。

光源氏晩年の「うし」

「つらし」と「うし」もまた、類義語である。「つらし」は、自分のつらいのは相手のせいであるとする、恨みがましい気持。他方「うし」は、自分のつらさは自分自身のせいであるとするのが原義であり、したがってし

ばしば、己が運命のつたなさを嗟嘆する心情を表わすことになる。前稿（『源氏物語』人物造型覚書、文学、昭55・6）で述べたように、源氏と恋の関係にある女君たちには、源氏への恨みを含む「つらし」がほとんど用いられず、彼女たちは最終的に「うし」によって己が運命を嘆くことになっている。これに対して源氏は、容易に靡くともしない女君への恨みや苦衷の思いを表わす語として「つらし」を多用している。そして源氏の「うし」にも偏りがみられ、葵の上をとり殺した生霊事件にまつわる道心や、須磨流離の憂愁、あるいは女三の宮事件の憂悶に集中しているのである。

ここでは、女三の宮事件が中心になる第二部全体での源氏の「うし」（全部で21例）を検討したい。なお、ここには「心憂し」をも含めた。

(a) (物の怪)「……いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、さすがにも恥ぢしたるけはひ変らず、(源氏は)なかなかいとうとましく心うければ、もの言はせじ、と思す。
(若菜下、二二七頁)

(b) (御息所は)うつし人にてだに、むくつけかりし人の御けはひの、まして世かはり、あやしきもののおさまになりたまへらむを思しやるに、(源氏は)いと心うければ、中宮をあつかひきこえたまふさへぞ、このをりはものうく、言ひもてゆけば、女の身はみな同じ罪深きもとゐぞかしと、なべての世の中いとはしく、……。

(若菜下、二二二―二二頁)

この六条御息所の物の怪(死霊)との対面で、源氏にかつての生霊事件をまざまざと想起させている点が最も重要である。葵の上がとり殺された当座の源氏は、「悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば」(葵、四〇頁)、あるいはその延長上で「うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かか

る絆だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし」(同、四四頁)と思った。これは源氏の最初の深刻な道心として、爾來彼の意識の底を潜流することになるとみられるが、右の辞句がこれに類同する点からも、源氏の胸底に隠されていた現実的な男女間の愛執への否定的な感情、ひいては現世執着一般への否定的な感情が奔出することになった。右の一連の「うし」は、厭い嫌う意に解されるが、自己の存在したいを厭う氣持をさえはらんでいよう。他者への怨恨などでは、まったくくない。前述の女君の、相手を恨むのではなく自己のつらさを嘆くという発想とも共通している。

こうした現世厭離の思念をぬきがたく抱くことを通過した段階で、源氏は女三の宮事件に遭遇することになる。その逆でない点にも注意されよう。

いで、あな、心うや。かく人づてならずうき事を知る知る、ありしながら見たてまつらむよと、わが御心ながら、え思ひなほすまじくおぼゆるを、……。(若菜下、二四四頁)

これ以下、「鈴虫」巻までの源氏の「うし」12例のほとんどすべてが、女三の宮事件に関わる表現であるが、右の例とほぼ同様に「うし」が、いやだ、厭うべきだ、の意として機能している。語義本来からすれば、やや派的な用法かもしれないが、これは前掲の、御息所の物の怪を人間の厭うべき妄執と見たのと同じ捉え方なのである。この「うし」の語に即してみる限り、源氏の物の怪への嫌悪と密通への嫌悪は重なりあい連続している。大げさな言い方をすれば、人間存在への懷疑をはらみつつ、御息所の物の怪も、女三の宮の不義も、根源的な課題として普遍化されていくということであろう。

世のはかなくうきを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。

(幻、五一頁)

こうした述懐が成り立つためにも、右の普遍化が考えられるべきであろう。いうまでもなく、この叙述の「世のはかなくうき」は、紫の上との死別だけを指しているのではない。ここでの世の厭わしさは、文脈上当然のことながら宿世に関わっていることになるが、だからといって源氏の厭世観がはじめから宿世観の導入によっていたわけではない。物の怪や不義との遭遇によって必然的に導かれたのである。この「うし」は、語が本来的にはらんでいる、己が身のいかんともなしがたい苦渋の感覚に近いであろう。

以上みてきたように、晩年の源氏はまず御息所の死霊との対面によって、胸底に巢食う現世憂愁の思念を噴き出すことになるが、その心情のこめられた心情語「うし」が頻繁に繰り返されることになる。逆にいえば、そのように繰り返される「うし」によって、源氏の苦悩を深化させ、物語の主題を鮮明にしているということである。